事件であったが、激動の相次い

はスターリンの権威を凌し

国とソ連とでは歴史の土壌が異 の)ぐものであろうし、また中

な大事件が待ち受けているから

されたのである。本替は、ジョ

いう第一線の優れた専門家が加 国から桑原寿二氏、柴田穂氏と

尖鋭化にいたるまで、多くの可

分析を通じて中国政治の深い矛

盾を突き、中国民族が毛なきあ

能性を考えながら「ソ連の中国

そのようなとき、本書が刊行

人類はすでに、スターリン神

いうまでもなく、毛・周両巨頭 よ真に重大な出来事を迎える。 できた中国は、これからいよい

にごすわけにはゆかない。 なるので、単純な類推でお茶を

なき中国への移行という歴史的

今日の中国にとって大変重要な 文化大革命も、林彪異変も、

周死後の中国

ているが、毛沢東のカリスマ性 「中国大陸」編集長、香港の著 予測し、フランズ・マイケル の将来に地方分権主義の危険を

エンリー・ウー氏は、中国経済

維持しかあり得ず、しかも、軍 集団指導体制による暫定的局面

治者が生まれるまで繰り返され

権力闘争が、新たな家父長的統

名な研究家、金雄白氏に、わがを論じて、和解と提携、対立の 集団指導と軍の台頭

教授は、毛・周死後の中ソ関係 の割拠は不可避だと予測してい 桑原氏は全国人民代表大会の

者の優位を説きつつ、後継指導 ると見、一方、柴田氏は、集団 ポットをあてている。 群像のそれぞれに手ぎわよくス 指導体制のなかでの実務型指導

に値するものである。 あり、専門家の意見として傾聴 時宜にかなった興味深いもので このように、本野はまことに

東京外大助教授 中嶋 嶺雄 (善本社・一二〇〇円)

語の崩壊、という歴史を目撃し リカの専門家、台湾の何雨文 フランズ・マイケル教授らアメ ージ・ワシントン大学の老練、 で執筆されたものである。 わり、それぞれのテーマを選ん アメリカの中国経済研究家ユ 権力闘争への介入」もあり得る としている。 何雨文氏は、毛・周死後には と現体制に耐え得るだろうかと 問題を提起している。 金雄白氏は軍人が主役となる

中里 恒子著

周死後の中国』

はなかたみ

さしかかった者の、厳しさであ

由自在な生を生きよう」。

り、寂しさであり、清さであ

一連、「夢の木」「終身」がま 「花篋」「もの言はぬ花」が女」を加える。ここ四年ほどの 創作を集めたもの。

のまたたき」が、才ではなく肌

とか、きょうだいであるとか、

る人間の温かみ、重さとして、 な貧しさを、作者は初めて触れ

しくはそこに踏み込んだ爽やか

そんな願い、あるいは夢、も

に染む実感として迫った者の、

も、頭の合点としてでなく、骨

わしさ、いさぎよさが、こんな

「さらば」と踏み切る辛さ、け

るとは、不思議である。 つぶやきにも似た筆でつむがれ 親子であるとか、夫婦である

しかし、その「気づかぬ人生

にある気づかぬ人生のまたた き、私は、さういふものを捕 ―極く普通の、日常性の中

李嘉編

な出来事をモチーフにした。 へたいと思つて、実在の小さ

筆の追う襞(ひだ)の細やかさ づかぬ人生のまたたき」とは、 と「あとがき」にある。「気 年輪を探ってみるまでもなく、 生ももう先の見える年齢になっ てからのことだろうか。作者の

書評

ひ」「浮絵」「車井戸」がもう

通、それに「花を持てる質

と肌理を言い当てて明るい。

簟に感じられるものは、晩年に

い相手と「一つ輪のなかで、自

文句が見える。人生の締切り

骨に染む、寂寥の影響 ろの絆を断ち切って、人生の最

でわかってくるのは、やはり人
それ故に耐えねばならぬもろも 寄せ合い、愛を洗って、いとし 後のひとときくらいは、孤独を 丹念に滲み出させている。

た、単純、軽快な生」といった か、「よけいなものを捨てきっ 「よけいな物を振り捨て」と してはなやぎが、寂寥の影とし 間の吐息の中に、しぶみの影と 何十年かを生きてしまった人

は妙である、粋である。 てあためきが、深切に息づくの 文芸評論家 進藤 純孝 (新樹社・九五〇円)